広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXVII　2015. 3. 20

オルフ・シュールヴェルクにおけるボルドゥンとシュトゥーフェンに関する一考察
—《クリスマス物語》（1948）の例証を通して—

吉　井　也代里
（本講座大学院博士課程前期在学）

Bordun and *Stufen* in *Orff-Schulwerk*: Examined in *Die Weihnachtsgeschichte*

Yayori YOSHII

Abstract

This paper aims to examine the similarities and differences between *Bordun* and *Stufen* in Carl Orff's *Die Weihnachtsgeschichte* (1948) and *Musik für Kinder* (1950-54). Following his studies of the music of the Middle Ages, Orff's musical style developed in a distinctive way, as evident with such works as *Carmina Burana* (1937). His musical style led to his philosophy of *elementare Musik* as an educator. An understanding of Orff's educational philosophy is therefore important when investigating his creative and educational activities. *Die Weihnachtsgeschichte* is a work Orff completed after he became involved with child education, which based on his practice at the Günther-Schule. After Orff's success with *Carmina Burana*, he made text of *Die Weihnachtsgeschichte* and Gunild Keetman composed that music. Following *Carmina Burana*, Orff developed an original musical style and composed mainly works for the stage, and his creative and educational activities have to be explored in the light of this background. With respect to such activities, this paper examines the musical features in *Die Weihnachtsgeschichte* with a particular focus on *Bordun* and *Stufen*, which are two of Orff's typical methods. This study also investigates the use of *Bordun* and *Stufen* in *Einführung Musik für Kinder*. The techniques of *Bordun* are based on three features. With *Stufen*, I identify the following features: (1) chord progression; (2) use of the dominant; (3) chord-based modulation between major and minor.

はじめに

本稿では，オルフ・シュールヴェルクの中から《クリスマス物語》（1948）と《子どものための音楽》（1950-1954）を取りあげ，その両者におけるボルドゥンとシュトゥーフェンの特徴の整合性や相違点を，具体的に例証することを目的とする。

《カルミナ・ブラーナ》（Carmina Burana, 1937）などの舞台作品を代表作にもつカール・オルフ（Carl Orff, 1895-1982）の独自の音楽スタイルは，中世の音楽を熱心に研究した結果，確立されたものである。また，彼の音楽スタイルは，教育者としての「基礎的音楽」[1)]（elementare musik）の理念に通ずるものがある。

我が国においてオルフの音楽教育は，音楽科カリキュラムの構成・改造にも影響を及ぼし，音楽の専門教育の場でも引き合いに出されるなどしてきたが，その教育理念が正しく理解されず，誤解されたまま取り入れられ続けてきた過去がある[2)]。それと同時にオルフの音楽教育は，実践的研究として取り扱われることが多いテーマでもあるため，歴史的・理論的志向からさらに補う必要性も有している。

これらのことをふまえて，オルフの教育理念を理解するにあたっては，作曲家としてのオルフのオリジナリティと，彼の音楽教育観の相関関係に着目することが一つの重要な視点になると筆者は考える。

本稿で取り扱う《クリスマス物語》は，オルフ・シュールヴェルクの中でも，《青少年の音楽》[3]（Jugendmusik）の標題をもつものに含まれている。第二次世界大戦後の 1948 年，オルフはババリア放送局（現バイエルン放送局）からの依頼により，ギュンターシューレ[4] での教育活動を根底に据えながら，子ども向け音楽番組の制作に携わっていた。1950 年から 1954 年までの 5 年間にわたるこのラジオ放送の集大成としてまとめられたものが，オルフ・シュールヴェルク《子どものための音楽》全 5 巻であることは有名であるが，《クリスマス物語》もこのラジオ放送のために書かれたものであり，放送を通じて 1948 年に初演された。

このように《クリスマス物語》は，オルフがギュンターシューレ時代に行ってきた教育活動をふまえ，「子ども」を意識した教育のスタートラインに立った直後の作品である。また，カルミナ・ブラーナの成功以降，独自の音楽スタイルを確立したオルフが，舞台作品を中心に作曲に取り組んでいた時期に生まれた作品でもあることから，オルフの創作活動と教育実践の関連性を探る手がかりとして，取りあげる意義があると考える。

本稿では，この両者の関連性を探る一環として，《クリスマス物語》の楽曲としての特徴を見出す。今回は，オルフの作曲手法の中でも特徴の大きいボルドゥンとシュトゥーフェンに着目し，ヴィルヘルム・ケラー（Wilhelm Keller）ほか著，橋本清司訳『子どものための音楽　解説』で明らかにされているボルドゥンとシュトゥーフェンの作法を参照しながら分析を行う。

1.『子どものための音楽　解説』から読み取れるボルドゥンとシュトゥーフェンの扱い

『子どものための音楽　解説』（橋本清司　訳）では，ヴィルヘルム・ケラー（Wilhelm Keller）によって《子どものための音楽》全 5 巻についての方法論（諸楽器の奏法と教育実践）が，フリッツ・ロイシュ（Fritz Reusch）によってオルフ・シュールヴェルクの基礎と目標が説明されている。本項では，ケラーが記した方法論の中から，ボルドゥンとシュトゥーフェンの扱いについて述べられている部分についてまとめる。

ボルドゥンとシュトゥーフェンは，いわゆる和声学的見地から配置したり，和声的伴奏の先行形式，前段階としたりするのではなく，音楽要素が動く中でのそのときどきの一つの異なった力関係と考えるべきで，和声的な力と共に高低的要素が引っ込んだり出てきたりするものであるとされている。ドミナントの和音でさえ，和声的な効果を要求するのではなく，この働きを音楽を構成する要素の中の一つの可能性として捉えるよう示唆しているのである。この考え方は，中世の音楽を研究することで作曲家としてのオリジナリティを生み出したオルフの音楽観が，本質的なものを柱とする「基礎的音楽」の教育理念に通じている一例として見ることができるであろう。

(1) ボルドゥン

ボルドゥンとは通奏される音程のことである。メロディーに対する最も簡単な支えとなる音であり，その多くが 5 度音程であると定義されている。ただし，5 度音程はいつも 5 度であるわけではなく，転回音程の 4 度として登場することがあることにも言及している。ボルドゥンの静止と不動性はメロディーの対極に位置しており，メロディーの動きを誘発する役割を担うことが明示されている。したがって，即興練習の基礎ともなる素材と捉えられており，簡単なボルドゥンから移動を伴うボルドゥンへ，さらに，これを発展させた形が様々なオスティナート音形になると述べられている。

移動を伴うボルドゥンの作法としては以下の 3 つのことが挙げられている。

① 5 度音程のうち，一方が装飾されて上下進行や順次進行，あるいは跳躍進行などをする。
② 5 度音程の 2 音とも平行進行，反進行で繰り返される。
③バス音は常に和声的な根音とは限らない。

(2) シュトゥーフェン

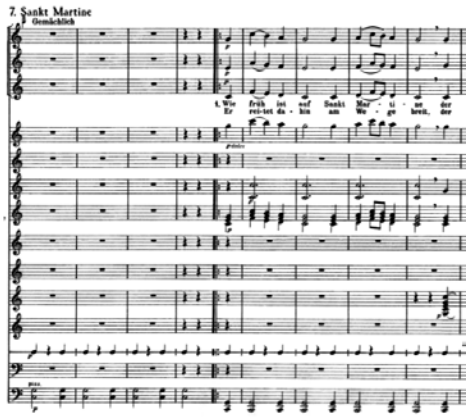
『子どものための音楽　解説』から明らかとなるシュトゥーフェンの作法を，①和音の進行，②ドミナントの扱い，③和音を基点とした長・短調間での転調の 3 つの視点からまとめる。

①和音の進行

①-1 その調の協和音（長三和音と短三和音）が平行に進行する

シュトゥーフェンの特徴として最も大きな特徴である。主旋律を最も高い声部として三和音が構成され，それが平行に進行する。機能和声的な発想としては禁則と捉えられることのある作法であるが，【譜例 1】は，保続音によって平行進行を緩和する工夫がなされている例曲として取りあげられている。

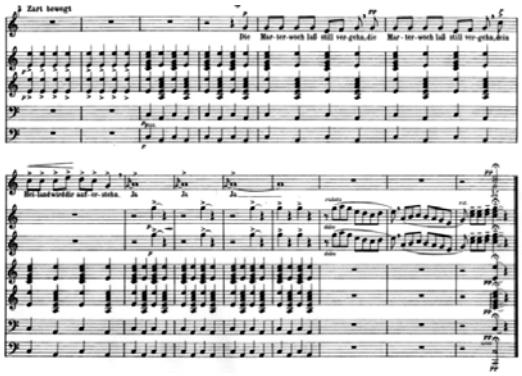
【譜例 1　子どものための音楽　第 2 巻
Sankt Martine pp.102-103】



①-2 メロディーとの関係性

長調系において，Ⅰ度とⅡ度の和音の関係は，メロディー的に強く結びついているため，繰り返し行ったり来たりできるという利点があることを示している。Ⅰ度とⅥ度は，両方の和音の間で 5 音音階になれる特性があることも挙げている。また，【譜例 2】では，7 音音階における長調のメロディーが，Ⅰ度とⅥ度の和音の交替によって短調色をもつことができることを説明している。

【譜例 2　子どものための音楽　第 2 巻
Die Matterwoch p.111】

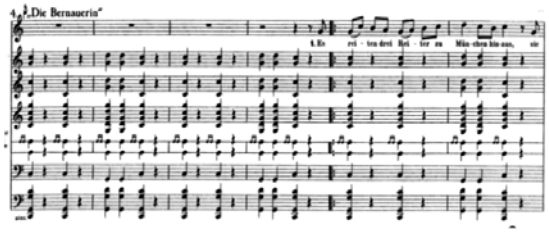


②ドミナントの扱い

②-1 ドミナントは，カデンツするドミナント和音ではなくて，浮動する和音として取り扱う

ドミナントの和音は特に慎重に扱われている。それは，本質的なものに制限するというオルフの理念を色濃く反映し得る和音だからであろう。ドミナントの和音は，声部的に進行させられたり解決させられたりするのではなく，一つの変わった和音形態（Klangmelos）として動かされるべきであると述べている。なぜなら，すべての音楽の発展を意識させることが可能になると考えているからである。最終的には，いわゆる機能和声的なドミナントの用法も現れることになるが，そこにたどり着くまでの段階を重要視していることがわかる。【譜例 3】は，ドミナントのもつ効果を制限した例曲として取りあげられている。この曲では，Ⅴ度和音上の第 3 音を省略しているため，ドミナントがもつ効果は 5 度下降することのみとなっていることが説明されている。さらに，5 度下降の効果は，それが力の先行するせき止めによって遅らされている場合に，強く働くと言及されている。

【譜例 3　子どものための音楽　第 3 巻
Die Bernauerin p.13】



②-2 導音の扱い

まず，長調系では減三和音を用いないため，長調のⅦ度の和音は使われないことを断言している。なぜなら，この和音は和声的な響きを引っ張る力をもっているからである。一方，短調系では，短三和音ドミナントをもつ，エオリア（Aeolian），ドリア（Dorian），フリギア（Phrygian）の諸旋法が使用される[5)]。

《子どものための音楽》第 5 巻では短調の属和音を，導音なしのⅤ度の和音と，導音を含むⅤ度の和音に分けて取り扱っている。導音効果の欠如は，ドミナント効果を再び 5 度近親関係の要素的な音程緊張

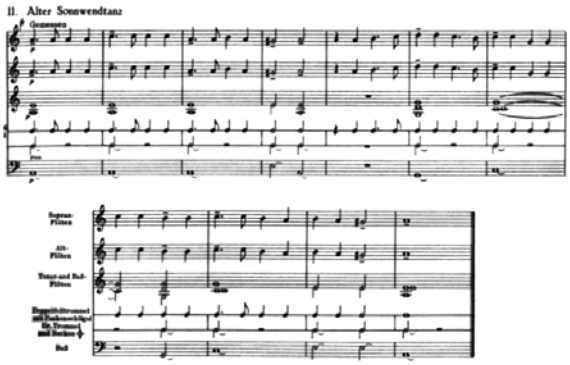
に逆戻りさせるという懸念を示しているが，導音のないドミナントを用いた曲での旋律法は，和声的な支柱から開放されないとしても和声的な支配からは自由であることに言及している。導音の扱い方は，さしあたりはひたすら用心深く，構成音と和音の形態による控えめな表現法で導音を引き入れたいとしている。【譜例4】では，導音は，純短調（エオリア旋法）の短7度音程をもつメロディーの中でも交替して現れることができることを説明している。ここで純短調の7度は，Ⅲ度の3和音で支持されるが，その和音はドミナント長3和音に対すると同時に和声的導音に対する一つの対立緊張の働きをしていると述べている。

③和音を基点とした長・短調間での転調

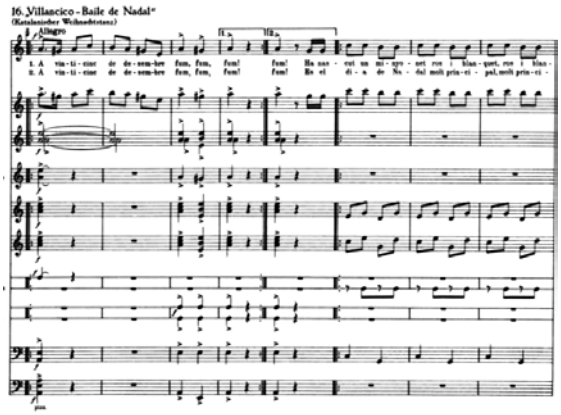
旋律短音階の下行形では半音高くした第6音と第7音が戻されるため，純短調（エオリア旋法）と長調化された短調が並立することになると述べられている。【譜例5】は短調のドミナントと平行長調のドミナント（短調のⅤ度上の短3度）を使用した例として取りあげられている。

その他にも，短調でのⅠ度―Ⅶ度の結合は長調のⅡ度―Ⅰ度，短調でのⅠ度―Ⅲ度の結合は長調のⅥ度―Ⅰ度と同じであることにも触れている。

【譜例4　子どものための音楽　第5巻
Alter Sonnwendtanz p.27】



【譜例5　子どものための音楽　第5巻
Villancico-Baile de Nadal pp.34-35】



2.《クリスマス物語》におけるボルドゥンとシュトゥーフェンの分析

『子どものための音楽　解説』から明らかとなったボルドゥンとシュトゥーフェンの作法と照らし合わせて，《クリスマス物語》のボルドゥンとシュトゥーフェンとの整合性や相違点を分析していく。

《クリスマス物語》の劇構成は表1のとおりである。本項では，曲中に台詞などを挿まない網掛け部分の楽曲についてのみを分析対象とする。なお，5曲目と14曲目のGloriaは，《子どものための音楽》第2巻に掲載されている曲と同一曲である。

物語は3人の羊飼いたちの対話を中心に展開される。グロッケンシュピールによる効果音が天使たちの登場を表現し，3人の博士たちがイエスのもとを表敬する様子が，2曲からなる行進曲風の音楽と羊飼いたちのやりとりによって描写されている。

表１　《クリスマス物語》劇構成

1. Einleitung	序曲。ブロックフレーテによる合奏。
2.	羊飼いの対話を背景に，牧場の様子がブロックフレーテで表現される。
3. Pastorale	パストラール。ブロックフレーテとチェロによる合奏。
4.	羊飼いの対話を背景に，グロッケンシュピールで天使のお告げが表現される。
5. Gloria	天使の合唱。児童合唱（天使）とグロッケンシュピール，トライアングル，シンバルを中心とした合奏。
6.	羊飼いの対話を背景に，グロッケンシュピールが奏される。
7. Marsch der Hirten	羊飼いたちの行進。ブロックフレーテによる合奏。
8. Vor der Krippe	羊飼いたちが飼葉桶の前でイエスを拝む様子が弦楽器で表現される。
9. “Benedicamus”	賛美歌。児童合唱（羊飼い）とブロックフレーテ，リュート，コントラバスによる合奏。
10. Kindelwiegen	マリアとヨーゼフが歌う子守唄。
11. Marsch der Heiligen Drei Konige (a)(b)	11 と 12 を通して，羊飼いの対話を交えながら，3 人の博士がイエスのもとへ表敬する様子が描かれる。
12. “Reverenz” (a)(b)(c)(d)	
13. “Dormi Jesu”	イエスに歌う子守唄。児童合唱・独唱の交互唱。
14. “ Gloria”	5. Gloria が終曲として再び登場する。

分析対象となる各曲の旋法をまとめたものが表２である。（F）は終止音が F 音であることを示す。1 曲が 2 つの音楽で構成されているものに関しては，両方の旋法を示している。この表から，ほとんどの曲がイオニアまたはエオリア旋法であることが明確である。

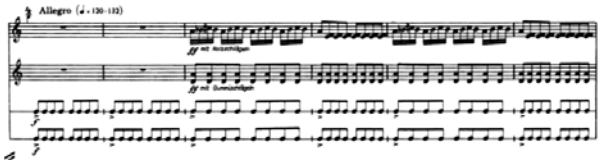
表２　《クリスマス物語》分析対象曲における旋法

1. Einleitung	イオニア旋法（F）／ドリア旋法
3. Pastorale	イオニア旋法（F）
5. Gloria	イオニア旋法
7. Marsch der Hirten	イオニア旋法
9. “Benedicamus”	エオリア旋法
10. Kindelwiegen	イオニア旋法（F）
12. “Reverenz” (a)(b)(c)(d)	イオニア旋法／エオリア旋法
13. “Dormi Jesu”	イオニア旋法（F）
14. “Gloria”	イオニア旋法

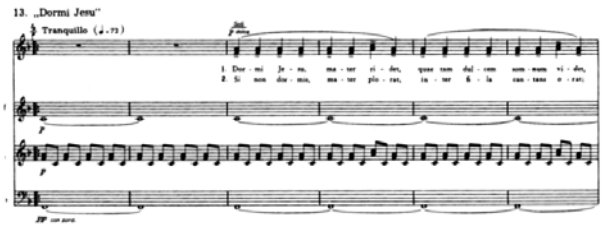
(1) ボルドゥン

『子どものための音楽　解説』では，ボルドゥンの静止と不動性がメロディーの対極に位置し，メロディーの動きを誘発すると説明されていた。12b. “Der Mohr” では，完全 5 度音程（D 音と A 音）のボルドゥンがシロフォンによって延々と連打される【譜例 6】。その上で奏される軽快なメロディーは，イオニア旋法の第 7 音が半音上げられた，つまり和声的短音階によって作られている。典型的なボルドゥンの使用例が，13. “Dormi Jesu” である【譜例 7】。全音符で伸ばされる完全 5 度音程（F 音と C 音）に加えて，『子どものための音楽　解説』で明らかとなった，完全 5 度音程のうちの一方が装飾されて跳躍進行するという役割をシロフォンが担っている。3.pastorale は，完全 5 度音程のボルドゥンが平行進行して繰り返される特徴によく当てはまる【譜例 8】。7. March der Hirten の後半部分は，完全 5 度音程（C 音と G 音）のボルドゥンが反進行している例である【譜例 9】。

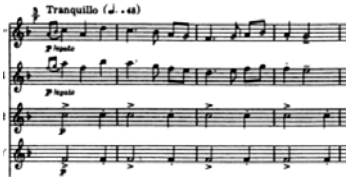
【譜例 6　クリスマス物語　12b. “Der Mohr” p.28】



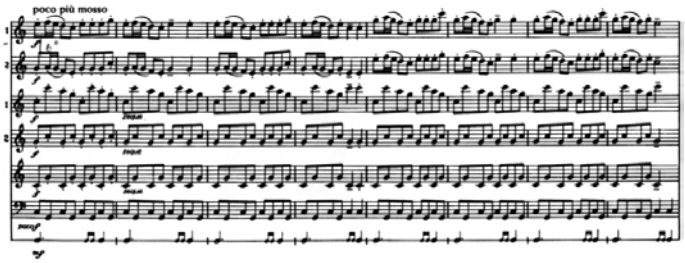
【譜例 7　クリスマス物語　13. “Dormi Jesu” pp.32-33】



【譜例 8　クリスマス物語
3. pastorale pp.4-5】



【譜例 9　クリスマス物語　7. March der Hirten pp.14-15】

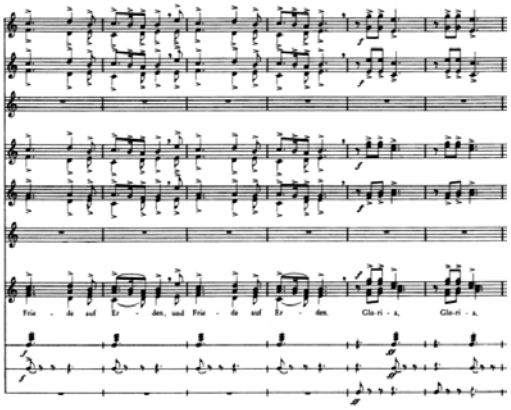


(2) シュトゥーフェン

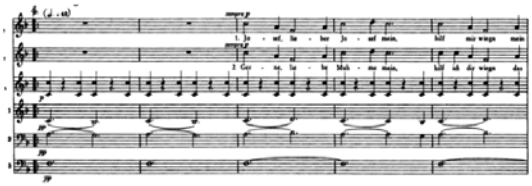
①和音の進行に関して

『子どものための音楽　解説』で明らかとなったシュトゥーフェンの最も大きな特徴は協和音の平行進行であった。この特徴は，《クリスマス物語》においても当てはまることである。代表的な例としては，5. Gloria の中間部が挙げられる【譜例 10】。また，10. Kindelwiegen では，Ⅰ―Ⅳ―Ⅰ―Ⅱが平行進行で繰り返されている【譜例 11】。

【譜例 10　クリスマス物語　5. “Gloria” pp.8-12】



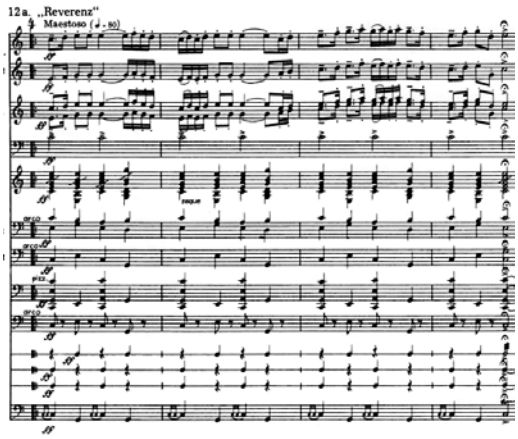
【譜例 11　クリスマス物語
10. Kindelwiegen pp.18-19】



②ドミナントの扱いに関して

12. “Reverenz” は，ドミナントが一つの和音形態として扱われている例に相当するであろう【譜例 12】。シュトゥーフェンはⅠ―Ⅲ―Ⅵ―Ⅴの進行を反復する。それぞれの和音において構成音（Ⅴ度の導音も）はすべて含まれている。ただし，ここでは通奏されるボルドゥン（C 音と G 音）が大きな役割を担っている。Ⅰ度における根音（C 音）はⅥ度の第 3 音であり，Ⅴ度における根音（G 音）はⅢ度における第 3 音である。このように，完全 5 度音程のボルドゥンを使用することで，ドミナントのもつ「5 度下降」の効果が強調されている。

【譜例 12　クリスマス物語
12a. “Reverenz” pp.27-31】

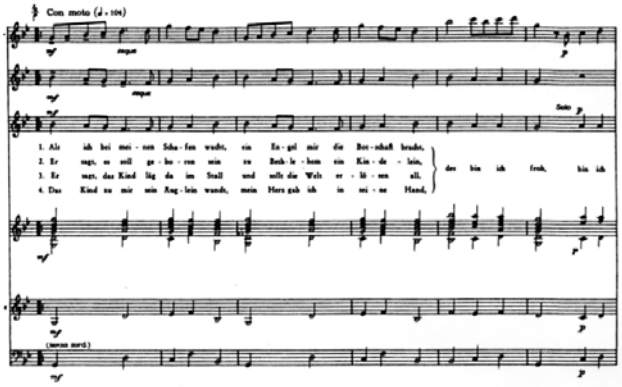


③長・短調間での転調

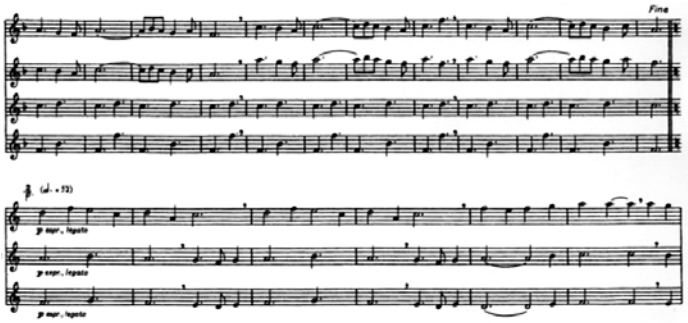
9. “Benedicamus” の冒頭では，短調から長調への転調が起こる【譜例 13】。エオリア旋法におけるドミナント（D-F-A）とイオニア旋法におけるドミナント（F-A-C）の間にサブドミナントの和音を置く（短調ではⅣ度，長調ではⅡ度の和音）ことで長・短調間の転調がなされている例である。また，1. Einleitung は長調と短調が A-B-A 形式の中で対に置かれている例である【譜例 14】。A はイオニア旋法，

B はドリア旋法である。A の最後の小節のバス音は I 度の根音（F）である。B のはじまりでバス音に F 音（I 度の第 3 音）を用いることでスムーズな転調が行われている。このことは，『子どものための音楽　解説』のボルドゥンの作法の中で見出された，バス音は常に和声的な根音とは限らないことに当てはまる例でもある。

【譜例 13　クリスマス物語　9. “Benedicamus” pp.16-17】



【譜例 14　クリスマス物語　1. Einleitung pp.1-2】



3. 考察

以上のように，『子どものための音楽　解説』からわかるシュトゥーフェンとボルドゥンの作法が，《クリスマス物語》の中ではどのように扱われているのか例証した結果，オルフ・シュールヴェルクの中では一貫した態度で，音楽を構成する諸要素を扱っていることが明らかとなった。表 3 は，『子どものための音楽　解説』から読み取ったシュトゥーフェンとボルドゥンの作法の《クリスマス物語》における整合性をまとめたものである。この表から，両者に特筆すべき相違点などなかったことがわかる。『子どものための音楽　解説』で明らかとなったシュトゥーフェンとボルドゥンの作法が全く含まれない曲はなく，ボルドゥンがひたすら根音で奏されている場合には，シュトゥーフェンの動きが特徴的であり，また，5 度音程のボルドゥンが装飾されるなどして，それだけで伴奏としての機能を果たしている曲もある。

『子どものための音楽　解説』の中で注意深く扱われていたドミナントについて，実際に，《クリスマス物語》の楽曲の多くでは，ドミナントの第 3 音（導音）は構成音の一つとして取り入れてあった。このことから，《子どものための音楽》全 5 巻を出版するにあたっては，ドミナントの和音を導音を含むものと含まないものに分けて取り扱うなどしているため，さらに細かく段階を踏んで音楽活動がすすめられるように意識したことを読み取ることができる。

《クリスマス物語》がラジオ放送を通じて初演された 1948 年当時は，《子どものための音楽》全 5 巻の基となる音楽番組が制作されていた時期である。今回の分析結果から，音楽の本質を捉えるというオルフ

表３　《クリスマス物語》分析対象曲におけるシュトゥーフェンとボルドゥンの整合性

	シュトゥーフェン	ボルドゥン
1. Einleitung	①協和音の平行進行 ③長・短調間の転調	③和声的根音でないバス音
3. Pastorale		② 5 度音程の平行進行 ③和声的根音でないバス音
5. Gloria	①協和音の平行進行	
7. Marsch der Hirten	②ドミナントの 5 度下降の効果	② 5 度音程の反進行
9. “Benedicamus”	③長・短調間の転調	
10. Kindelwiegen	①協和音の平行進行 ②ドミナントの 5 度下降の効果	
12. “Reverenz” (a)(b)(c)(d)	②一つの和音形態としてのドミナント	① 5 度音程の跳躍進行 ② 5 度音程の平行進行
13. “Dormi Jesu”		①一方が装飾された 5 度音程の跳躍進行
14. “Gloria”	①協和音の平行進行 ②メロディーとの関係（Ⅰ度・Ⅱ度）	③和声的根音でないバス音

の姿勢はすでに確立されていたことがわかる。和音を平行進行させたり，メロディーと一体化させたりするポリフォニー音楽的な側面は，長い西洋音楽の歴史の中で発展してきた音楽を，古いものに戻っていくことで極限までそぎ落とした形として, オルフのオリジナリティの中心に根付いているのである。そして，単純明快な要素であっても，組み合わせ方によって響きの豊かな音楽となり，初めから装飾されすぎていない要素であることによって，音楽活動を展開していく中で，より自由に発展させていくことができることを再認識できた。

おわりに

本稿では，『子どものための音楽　解説』から読み取れるボルドゥンとシュトゥーフェンの特徴を，《クリスマス物語》を用いて具体的に例証した。今後，オルフの創作活動と教育実践の関連性を探るにあたっては，《クリスマス物語》に近い時期に作曲されたオルフの舞台作品と比較検討することもできるであろう。作曲家としてのオルフが残した舞台作品を分析することからオルフの音楽性を明らかにしたうえで，オルフとその協力者たちが共同で取り組んできた教育活動や，その成果としてまとめられたシュールヴェルクに, オルフの芸術的な意図と関連づけてアプローチしていくことが今後必要であると考える。さらに，彼の音楽スタイルが，教育者としての理念に通ずるものがあることを明らかにするためには，オスティナートが，子どもたちの音楽活動においてどのように効果的なものかについても考察を深めていかなければならないと考える。

注

1）中地（2000）は, ニクリンの解釈を援用し, オルフの基礎的音楽の理念を分析的に再構築している。「基礎的　elementare」という語は，〈初歩的〉と〈本質的〉という 2 つの意味を持ち，〈初歩的〉は単純な初心者（子ども）用の音楽を示し，〈本質的〉は，基底的な音楽体験を示し，成人や既習者に対しても適応される概念となることを説明している。さらに，主体から見た基礎的（elementar）な学習は，創造的内省の瞬間や自己が認識していないものとの出会いを意味すると解釈している。一方で，客体からこの語を捉えると，表現や経験を導く基礎的内容の獲得を意味することを示している。

2）我が国におけるオルフの音楽教育の受容と発展の流れについて言及されているものとして，［井口，2006］［中地，2006］［藤井，1998］などが挙げられる

3）《青少年の音楽》は，オルフが舞踏家のドロテー・ギュンター（Dorothee Günther）と 1924 年に設立した，ギュンターシューレ（Günther-Schule）で教育活動を行うときに扱った器楽曲を転用したものが中心となった曲集である。

4）オルフはここで，音楽やダンスを専門的に学ぶ学生のために，音楽と動きを結びつけたリズム教育の

実現を目指していた。この取り組みへの反省を生かして，《子どものための音楽》では，音楽と動きにことばを融合させている。

5）ちなみに，短調系ではこれら 3 つの旋法が扱われていることにも，本質的なものだけに制限するという理念が反映されている。エオリア旋法は 7 音音階の他のどの音とも減・増音程を作らないため「純短調」と記されている。ドリア旋法はⅥ度の和音が長調性格をもっているため，対立性・対極性を表現することに適すると示されている。一方でフリギア旋法は，Ⅰ度―Ⅱ度の短 2 度が暗い短調としての性格をもつとされ，ファーシの増音程がトニックの安全を乱すことから苦悩や懐疑を表現できると述べられている。

引用文献

藤井康之（1998）「我が国のオルフ研究における Elementare Musik 受容の史的変遷とその課題―Orff-Institut Studienplan から学ぶもの―」『音楽教育史研究』音楽教育史学会，pp.41-52。

井口太（2006）「オルフ・シュールヴェルクの導入と展開への史的検討」『戦後音楽教育 60 年』音楽教育史学会，pp.163-176。

Keetman, Gunild /Orff, Carl (1952) *Die Weihnachtsgeschichte*, Schott.

ケラー，W./ ロイシュ，F.（橋本清司訳）（1971）『子どものための音楽　解説』音楽之友社（= Keller, Wilhelm (1963) *Einführung in Musik für Kinder*, Schott.）

中地雅之（2000）「オルフ･アプローチの受容と実践的展開における問題と可能性―日･独音楽教育の縦断･横断的比較研究―」『音楽教育学研究 1 音楽教育の理論研究』日本音楽教育学会，pp.307-321。

中地雅之（2006）「外国音楽教育思想の影響 2. ドイツ語圏からの影響」『戦後音楽教育 60 年』音楽教育史学会，pp.196-205。